

SABCS 2006 印象記

それでも息づく健全な批判的精神 —2006年のサンアントニオ乳癌シンポジウムを振り返って—

向井 博文 (国立がんセンター東病院 化学療法科)

12月14日～17日にかけて第29回サンアントニオ乳癌シンポジウムが開催された。4日間にわたる学会は基礎から臨床まで幅広く網羅され、熱い討論が行われた。本学会は年々参加者が増え、それに伴い発表データも多くなっているが、特に最近の傾向として、“preliminary data”と称しての発表の多さが目立つようになってきている。事前にプロトコールにより計画された中間解析で、かつ独立した評価委員会から許可を得たものを発表というのであれば、最終結果を先取りして世に公表ということで、それなりに意味はあるだろう。しかし多くは単に一時的に耳目を集めるだけ、なかには発表のたびに結果が違い周囲を翻弄しかねないという類のものもある。これらを排除するだけで学会ははるかにシンプルで密度の濃いものになると思われるのに、学会主催者側としてはより多くの参加者を呼ぶための方策として間口を広げることは如何ともしがたいのだろうか。発表者にも慎重な姿勢が求められよう。

一方で、今回発表されたEBCTCG (Early Breast Cancer Trialists' Collaborative Group) のように極めて多数の症例を徹底的

に follow up して調べ上げれば、安易な批判は寄せ付けない迫力が生じる。コツコツと行った地道な努力が世界からの尊敬を勝ち得ている。学会がサロン化したら終わりだが、そこはさすがに旺盛で健全な批判的精神が息づいており、おかしな発表に対しては的を射た手厳しい質問が相次いでいた。

今回いくつかの発表で、過去の知識からは説明が容易ではないもの、あるいは整合性が取れないものがあつた。これをあえて統計学的に説明しようとすれば、多数の症例を対象としたランダム化比較試験といえども、バイアスや偶然性を完全に排除することはできず、真実に行き着くにはある程度の数の臨床試験を実施して、その中から共通項を探し出すしかない、ということになるだろう。あるいは、「群盲像を撫でる」の諺どおり、癌の本態理解からはまだまだ程遠い場所にいる私たちは、依然としてごく一部の事象を取り上げて評価、批評しているにすぎず、分かっているところだけをつなぎ合わせて全体を推測しようとしても、どうしても無理が生じてしまうとう理解すべきなのかもしれない。道のりはまだまだ遠いのだろう。